

県立図書館だより

平成30年6月

青森県立図書館報 第31号

デジタルアーカイブから



『青森市鳥瞰図』（吉田初三郎[画] 青森市 [1948]）より「ねぶた祭之図」

（詳細は <https://www.plib.pref.aomori.lg.jp/top/digital/cont/t0746.html> をご覧ください）

目次

デジタルアーカイブから	1
特別展「平成の青森文学」	2
こんなレファレンスがありました	3
こどものひろば	5
ご存じですか？この資料	6
ようこそ文学館へ！	7
カウンターからひとこと	8

青森県近代文学館特別展

「平成の青森文学」

青森県近代文学館では平成30年7月14日（土）から9月24日（月・祝）まで、企画展示室において「特別展 平成の青森文学」を開催します。

青森県は、明治、大正、昭和と、その時代時代に数多くの個性豊かな文学者を輩出してきました。青森の風土から生み出され受け継がれた「青森文学」の伝統は、平成の世にどのような形で流れ込んだのでしょうか。区切りを迎えようとしている平成の時代、その30年間における青森文学の展開を概観します。

十代のはじめを青森市で過ごした、なかにし礼の直木賞受賞作「長崎ぶらぶら節」の浄書原稿（専用原稿用紙）及び初校ゲラ、再校ゲラ、校了ゲラ等（以上、日本近代文学館蔵）を展示します。また、古川智映子（弘前市出身）『小説土佐堀川』と平成27年NHK朝の連続テレビ小説「あさが来た」の関連資料を展示します。

「現在活躍中の作家・作品の展示を」というご要望が寄せられておりましたが、これまで当館でご紹介する機会が得られなかった作家及び作品もご紹介します。

【展示資料】古川智映子寄贈「あさが来た」関連資料



古川智映子（ふるかわちえこ）は、昭和7（1932）年弘前市に生まれました。

大同生命創設に携わり、日本女子大学創立に力を尽くした女性、広岡浅子に強く心惹かれた古川さんは、知られざるその生涯を掘り起こし、昭和63（1988）年、『小説 土佐堀川 女性実業家・広岡浅子の生涯』（潮出版）に結実させます。この

本があのNHK連続テレビ小説「あさが来た」（平成27（2015）年下半期放送）の原作本です。

今回、古川さんから御寄贈いただいた、「あさが来た」放送台本を初めとする貴重な資料を公開いたします。なお古川さんからは、この展示のために特別に寄稿していただきました。是非展示会場に足を運んでいただき、ふるさとへの感謝にあふれた文章に触れていただきたいと思います。

～ こんなレファレンスがありました ～

【第28回】

故郷(ふるさと)の話題読み語り

「青森県でしか遭遇できない、“レアキャラ”たち」



「ポケモンGO！」は、まだまだ人気のように、図書館の敷地内でも昼夜問わず、捕獲に夢中の皆さんを、お見掛けします。(夜、建物裏手から突然、スマホの明かりが現れてどっきりすることも…。)

先日、インターネットのサイトで、「青森県立図書館」での出没情報がまとめられているのを見て“なるほど”と思いました。普段、何気なく過ごしている場所に、こんなに楽し気なモンスター達がこっそり潜んでいるのか…と思うと、ちょっぴり愉快になりました。

キャラ捕獲後は図書館に立ち寄り、本も借りて行ってくださいね。

なお、敷地の出入口は午後10時で施錠となりますので、ご注意ください！

さて、今回のご質問は、日本古来の由緒正しきモンスターが主役です。

【質問】

「妖怪」が大好きなんだ！児童室の妖怪の本は、全部読んだよ！

ねえ、青森県でしか会えないレアな妖怪っている？どこに行ったら会えるかな？

妖怪事典片手に児童室からやってきた、小さな「妖怪博士」からいただいたご質問です。青森県には、不思議な言い伝えがたくさんあります。その中には、「大人」や「鬼」、^{おおひと}「河童」や「水虎様」、^{おに}「さんご狐」に、「ずんべら坊」、「甘酒婆」に「雪女」など、ポケモンキャラに負けなくらい大勢の妖怪たちが登場します。

^{あやかし}妖が私たちの生活の身近にあったことは、童謡「もっこくらねえ」の「もっこ」が、妖怪やお化けの幼児語「あも」や「あもっこ」からきているという説があることからわかります。

さて、博士のご要望は、「青森県でしか会えないレア妖怪」です。と、なると、全国各地に似たような言い伝えのある有名どころは、紹介できません。

ですが、博士、ご安心あれ！ちゃんとおりますとも！

まずは、宝暦十二(1762)年頃、南谷先生なる人物によってまとめられた『^{きこくせんがいろく}姫國山海録』(「姫国」とは、日本の異称です。)に紹介されている、名もなき謎の生き物(右図参照)です。

この書は、南谷先生曰く、嘘も多いので、信用できる情報を厳選した！と言いつつも、神話・伝説などが多く記述されている中国の地理書『^{せんがいきょう}山海経』を倣ったもので、北は北海道から南は九州まで、日本各地で目撃された怪獣・妖虫の類二十五種が、図とともに記録されています。

この生き物、解説の文に「奥陸津軽海邊」とあります。

「奥陸」とありますが、『義経記』や謡曲『烏帽子折』では、「奥陸奥」^{おくむつ}とも書かれていますし、「津軽」とありますので、間違いなく「青森県」固有のレア妖怪です。

説明では、「津軽の海辺にいて、秋がくると出てきて、栗



此物 在 奥陸津軽海邊 秋
来 出 食 栗 穂 土 人 以 鎗 殺
之 享 保 加 之 事 也 其 後 不
見 津 軽 刺 史 之 臣 山 尾 長
八 郎 親 春 之 也

『姫國山海録』より
津軽の海辺の草食系妖怪？

穂を食べる。」ようです。

よく見ると、海辺の生き物らしく、足には水かきらしきものが見えます。生魚くらいバリバリ喰いそうな容姿なのに、抱えている（尻尾のようにも見えますが）粟穂（雑穀）好きな草食系です。享保の頃、槍で殺されてしまったそうで、その後は見なくなったとのこと。「津軽藩士の尾長八郎が直接見た」といったことが書かれていますが、現在は残念ながら会うことができないようです。

次に紹介するのは、「ぬのがらみ」という沼の主です。

出現場所は、田子町の長坂にあった沼。『田子町郷土誌資料集』（田子小中学校父母と教師の会 1953）や『陸奥の伝説』（森山泰太郎/編著 第一法規出版 1976）によると、その名の通り布に化け、ほとりの垣に掛かっちは、布を取ろうとする人を絡めとり、沼に引きずり込んで食べてしまうという、なんとも物騒な妖怪です。

しかし残念(?)ながら、この妖怪も、現在はお会いすることはできません。妻と娘を食べられてしまった男が、神様のお告げにより、壊した「鳩の卵」を沼に投げ込んだところ、「ぬのがらみ」の正体が死んで浮き上がり、見事仇討ちを果たしてしまったからです。

※何故、鳩なのか、「正体」が何かは記述がありませんでした。

さて、最後は、『津軽口碑集』（内田邦彦/著 郷土研究社 1929）より「河女」です。『津軽口碑集』は、昭和四年、五所川原で医師をしていた内田氏が、医業の傍ら、津軽をくまなく踏査して採集した民俗に関する話題をまとめたもの。

この本でしかお目にかかれない貴重な事物・妖あやかしが満載です。

「河女」の目撃情報が残っているのは、現在の青森市浪岡。

大変美しく、とり憑かれてしまった男性は、何故か急にお櫃ひつ（現在なら、炊飯器でしょうか）を空にするほど大飯食らいになり、加えて、夜な夜な「河女」に会いにゆくようになるそうです。何故大食漢にするのか。太らせて食べてしまうわけでもないようですから、もしや、「河女」はぼっちゃり好きなのでしょうか。

「河女」は特に退治された様子はありません。現れるのは夏の夜限定。現在でも十川の釜谷橋付近の土手に現れる可能性が。会いに行ってみてはいかがでしょうか？

ただし、憑かれた男性は、後に精神に異常をきたして死んでしまうそうです。ご注意ください。

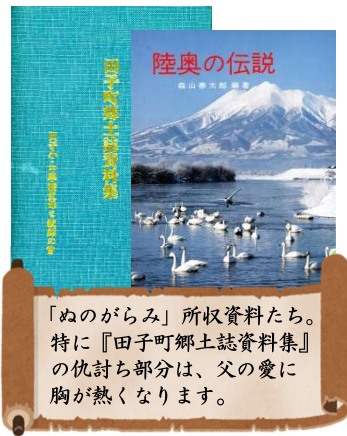
『津軽口碑集』には、他にも、峠に住む「たこ」と名乗る蛇身の女妖怪や、木の上からぶら下がる真っ赤に燃えた籠の怪「イジコ」、雨の日に見える怪炎「もる火」などの言い伝えが紹介されています。

ご紹介した妖怪以外にも、西津軽郡赤石村（現在の鯉ヶ沢町）の山路に出現する「サダ」（憑かれると何故か鼻水が出てきます。地味に迷惑!）など、レア妖怪天国の青森県。

どうでしょう博士、ご満足いただけただけでしょうか。

● レファレンス申込み及び問い合わせ先

青森県立図書館 参考・郷土室 電話 017-729-4311 FAX 017-762-1757
電子メール sanko@plib.pref.aomori.lg.jp



こどものひろば



「おしえて先生！知るしるするる探検隊」

皆さんは、「おしえて先生！知るしるするる探検隊」を知っていますか？「知るしるするる探検隊」は、不思議な科学の世界、いろいろなお仕事の世界、楽しいスポーツの世界など、いろんな世界のひみつを探検するイベントです。



毎月第4土曜日、県立図書館児童閲覧室や集会室で、午後2時より行っています。（※平成30年度の5、6、7、8、9月は3時まで）参加申込みは不要で、毎月テーマに合わせた隊長をお呼びして、様々な探検や本の紹介もしています。

探検の最後には、隊員証とシールのプレゼントもあります。年度末最後の探検隊では、他にもプレゼントがあるかも…。

平成30年5月 知るしるするる探検隊

「縄文ものづくり～ねんどで手形をとろう～」

5月26日（土）、県立図書館集会室にて、青森県埋蔵文化財調査センターの浅田智晴隊長と、「縄文」の世界を探検しました。三内丸山遺跡のお話や縄文時代の様子、なかなか見ることのできない貴重な足型などを見せてもらいました。最後には、紙粘土を使って、縄文時代と同じように手形をとりました。

親子そろっての参加者が多く、貴重な体験ができた楽しい探検隊となりました。

縄文探検第2弾として、7月の「知るしるするる探検隊」では、「もう一人のワタシ～ちっちゃな土偶を作ろう～」をテーマに、青森県考古学会の成田滋彦隊長と一緒に探検します。実際に土偶を作ったり、隊長から土偶や歴史について教えてもらいます。

青森県では、三内丸山遺跡の世界文化遺産の登録を目指しています。県立図書館でもイベントを通じて、皆さんに縄文文化について知ってもらいたいと思っています。第2弾からの参加も大歓迎ですので、ぜひ児童室に遊びに来てください。

この他にも30年度の「知るしるするる探検隊」では、家族対抗ゲームの世界や、ねぶたの色塗り体験なども予定しています。家族やお友達を誘って、楽しい探検に出かけましょう！皆さんの参加をお待ちしています。



イベントのお知らせ

●知るしるするる探検隊

科学の実験やいろいろな仕事の人との交流、スポーツなどの体験、本の紹介などを行っています。

日時：毎月第4土曜日（12月、3月を除く）午後2時～2時30分

場所：青森県立図書館児童閲覧室 ほか

●おはなし会

読み聞かせボランティアと図書館職員による絵本の読み聞かせやブックトーク、子どもたちからリクエストされた絵本の紹介をしています。

日時：毎月第2土曜日 午後2時～2時30分

場所：青森県立図書館児童閲覧室

ホームページで、過去のイベントの様子もご覧いただけます。

こどものへや HP (<https://www.plib.pref.aomori.lg.jp/index.html?id=1>)



今回は明治時代において反骨のジャーナリズム精神を貫いた新聞記者・^{くがかつなん}陸羯南 (1857-1907) について紹介します。

羯南は安政4年(1857年)に津軽藩士の子として弘前に生まれました。身を立てるため、東奥義塾、官立宮城師範学校、司法省法学校に学んだあと、青森新聞社員、太政官、内閣の役人を務めました。明治21年(1888年)に内閣官報局を辞職し、言論活動を本格化させ、明

治22年(1889年)の大日本帝国憲法が發布された日と同じ日、新聞『日本』を創刊します。

欧米のような国民の権利と平等を実現させるために、言論によって国民を啓蒙することを新聞の職分と考えていた羯南は、新聞『日本』を拠点に、社主として20年近く国民主義を掲げて活動を行いました。新聞『日本』はそれほど過激ではありませんでしたが、政府の欧化政策や藩閥専制政治を批判し、計30回、230日と経営圧迫を受けるほどのたび重なる発行停止処分を受けました。それでも、羯南は筆を曲げることはありませんでした。

社員を道具のように高圧的に扱うことなく、彼らの自由を尊重していた羯南の指導の下、新聞『日本』からすぐれたジャーナリストや芸術家が輩出しました。その中のひと

り長谷川^{によぜかん}如是閑(1875-1969 ジャーナリスト)はのちに「(日本新聞の)記者全体が先輩も後輩もなく全く一つになつて、時には摺み合ひもあるが、全くのざつくばらんで、私自身はたゞ気の知れた友達同士の中にもるとしか思へなかつた。」「社員は陸さんのことを「社長」などゝは決して云はなかつた。皆たゞ「陸さん」又は「陸翁」といつてみた。」(『日本及日本人』1923.9)と思いを綴っています。



「日本」創刊号(明治22年2月11日)

います。また、復刻版新聞『日本』(ゆまに書房 1988)は、館内をご利用いただけます。ご希望の方はカウンター職員にお尋ねください。

ようこそ文学館へ！

近代文学館資料の紹介(第30回)

エクステンド常設展示「北島八穂」資料から

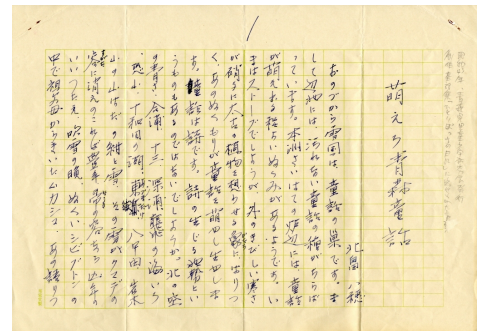
青森県近代文学館では6月1日(金)から11月28日(水)までエクステン
ド常設展示「北島八穂」を開催しています。北島八穂は、青森県が生んだ児童
文学作家です。逆境にめげずたくましく生きる子どもたちの姿を、病と闘いな
がら、みずみずしく描きました。今回は展示資料の中から、原稿「萌えろ青森
童話」と『鬼を飼うゴロ』をご紹介します。

①原稿「萌えろ青森童話」＜6/1(金)～7/25(水)期間限定展示＞

「萌えろ青森童話」は、北島八穂が青森県児童文学研究会に「励ましのこ
とば」として寄せました。青森県児童文学研究会は、昭和35年、北彰介(1926-2003)
が立ち上げ、「子どもに美しい夢を」のスローガンのもと、童話創作や民話の普
及、手作り遊びなどを中心に活動を続けています。昭和42年、会員による初め
での創作集『ひとりぼっちの日記』刊行に先立ち、北彰介は郷里の先輩作家である北島八穂に初めて
手紙を書き、推薦文を依頼。その依頼に応じて書かれたのが、この「萌えろ青森童話」でした。

青森は、童話の萌え出るぬくもりがあり、しかも詩心のかきたてられるところ。青森の子どもが、す
こやかで自在な魂を成長させるように願って童話
を書きつづけよう、と、津軽弁を交えた文章で、後
輩作家たちを激励しています。

八穂が生涯抱き続けた、郷里の人々への熱い思いが伝わる資料です。

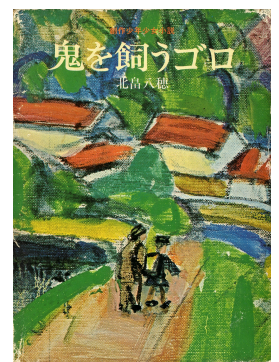


原稿「萌えろ青森童話」

②『鬼を飼うゴロ』

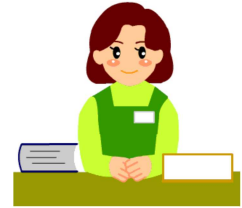
山の少年ゴロの耳の奥には小鬼のポンチが住みついている。
東北の美しい自然の中で、ゴロは逆境にめげずたくましく成
長していく。

第10回野間児童文芸賞、第19回サンケイ児童出版文化賞大
賞受賞。常設展示室の北島八穂コーナーには、**野間児童文芸賞
賞碑・賞状**も展示していますので、一緒にご覧いただけます。

『鬼を飼うゴロ』
(昭和48年8月)

エクステンド常設展示「北島八穂」では、北島八穂の児童文学作品を展示し、
その作品に対する八穂の思いをご紹介します。入場は無料です。

カウンターからひとこと (第29回)



今回は、「開館90周年記念カード」についてお知らせします。



開館90周年記念カードデザイン



通常の利用者カードデザイン

当館は、2018年に開館90周年を迎えました。

これを記念して、2018年3月から限定・シリアルナンバー入りの利用者カードを発行しております。

デザインは、「天印（てんいん）」という、本の上部に押している判に「九十周年」という文字が入った特別版です。

発行は、限定2,000枚で、シリアルナンバーが0001/2000のように入ります。

2018年5月末現在で、残り少なくなっております。この機会に今しか作ることでできない記念カードを作りませんか。

「天印（てんいん）」をもう少し詳しく・・・

図書の所有者を明示するために用いる印を「蔵書印」と言います。当館では、通常は「青森県立図書館」の文字と県を形作ったイラストが丸い円の中に描かれたデザインの印を本の上部に押しています。



本の上部を「天（てん）」と呼ぶので、そこに押す印を「天印」と言います。他の図書館では、本のノド（とじ目の余白部分）以外の部分に押す「小口印（こぐいちいん）」、特定のページの目次に付きにくいノド部分に押す「隠印（かくしいん）」などを採用しているところもありますので、そこに注目するのも楽しそうです。

ちなみに、所有者を明らかにする小さな紙片「蔵書票」を見返しに貼る習慣がヨーロッパで行われたのに対し、蔵書印の方は東洋で発達したそうです。

【参考資料】『図書館情報資源概論 改訂版』宮沢厚雄著 理想社 2012

『図書館用語集 四訂版』日本図書館協会 2013